

体験する
ことから
学びたい。

高齢者・片マヒ疑似体験セット「まなび体」
デザイン開発・研究プロジェクトのあゆみ

株式会社 特殊衣料

TOKUSHUIRYOU
2-40, 14-CHOME, HASSAMU 14-JO, NISHI-KU, SAPPORO 063-0834 JAPAN
tel 011-663-0761 <http://www.tomoni.co.jp>



製品を通して

社会と

関わりたい。

「身体が不自由になった人を見守るとき、
傍らにいる人はどのような配慮をしたらよいのだろうか」

今から10年程前、弊社では札幌市社会福祉協議会の地域活動支援事業に携わる方からの要望を受けて、片マヒ疑似体験装具の開発を始めました。

当初は従来品の不具合を確認し、できるだけコストをかけずに商品化していこうという、安易な考えがあったことは事実です。また、受注生産のため、お客様のご要望にお応えできないこともありました。その後、本格的にプロジェクトとして取り組むようになりました。

おかげさまで、今ではご利用いただいたお客様からのご意見、ご要望をさらに製品の質の向上と信頼につないで、多くの皆様にご利用いただけるようになって参りました。

販売数量が毎年増えている理由には、教育現場や社会福祉協議会などからの関心の高まりがあげられますが、私は、その背景には昨今のつらく悲しい事件や事故が増え続けていることにもあるのではと推察しております。大切な人の痛みを知ること、相手を思いやる心が芽生え、ともに支えあう社会でありたいと心より願ってやみません。

小誌は、疑似体験セット「まなび体」が開発から10年を迎えましたことと、販売数量が1000セットに達したことを機に、弊社のものづくりの姿勢を再確認の意味で作成致しました。お時間のあるときに
ご一読いただければ幸いです。



2006年9月
株式会社特殊衣料 代表取締役社長
池田 啓子

●疑似体験セット『まなび体』 デザイン開発・研究プロジェクト活動年表

1997年

- 開発に着手
- 10月 国際福祉機器展出版発表（東京ビッグサイト）
- 12月 片マヒ疑似体験「まなび体1」販売開始

2000年

- 1月 片マヒ疑似体験「まなび体2」販売開始
- 9月 高齢者疑似体験1販売開始

2001年

- 4月 片マヒ疑似体験「まなび体1」 意匠登録 1112528号
- 8月 片マヒ疑似体験「まなび体1」 意匠登録 1124292号

2002年

- 12月 第1回プロジェクト会議

2003年

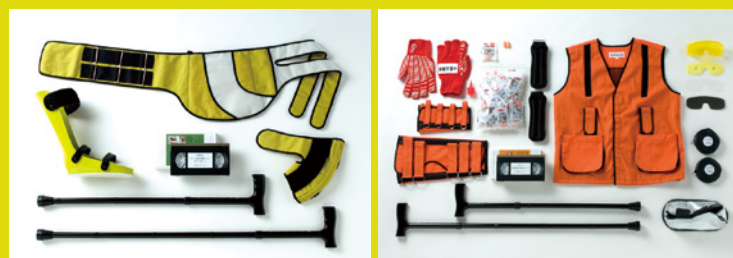
- 1月 第2回プロジェクト会議
- 2月 第3回プロジェクト会議
- 3月 第4回プロジェクト会議
- 5月 第5回プロジェクト会議
- 7月 第6回プロジェクト会議
- 10月 国際福祉機器展出版発表（東京ビッグサイト）

2004年

- 1月 高齢者疑似体験2販売開始
片マヒ疑似体験「まなび体3」販売開始
- 2月 高齢者疑似体験2 実用新案登録 3101007号
- 6月 片マヒ疑似体験「まなび体3」
実用新案登録 3103376号
実用新案登録 3103540号

2006年

- 疑似体験セットの製品名を「まなび体」に統一



●「まなび体」片マヒ疑似体験セット(左)と高齢者疑似体験セット(右)
それぞれ付属のキャリングケースに収納できる

二〇一五年には 団塊の世代が 高齢者になりきる。

少子高齢社会がやってきた。1人の女性が生涯に何人の子どもを生むかを示す合計特殊出生率は、1.25にまで落ち込んだ。1.57ショック、あるいは1.53ショックと言われた時代が、今では遠い昔の話になったといえる。

2005年に改正された介護保険法では制度の持続可能性を謳い、介護予防に力が入れられた。改正の先には2015年の「高齢者」の介護問題が控えている。2015年には団塊世代が高齢者になりきる。その数は3200万人を超える。さらに後期高齢者になったとき、私たちの社会はどうなっていくのだろうか。

そのときにキーワードとなるのが「地域」であり、住民による支え合いであろう。言葉を変えれば、そうでもない限り、私たちの「生活」は守れない。介護保険だけでは、介護は支えきれず、年金だけでは暮らしを営むことはできない。頼りになるのは、「地域」である。

これは、子育てにもいえる。登下校の際の見守り、閉じこもりがちな家庭、どこかで「発見」を待っている人はたくさんいる。

だが、残念なことに私たちは長く、自分や自分の家族以外の人の存在を、忘れてきたのではないだろうか。地域にはさまざまな年齢や障害を持つ人がいることを忘れてきた結果、バスや電車で席を譲るといったちょっとしたことまで、厭うようになった。

とはいえ、他者への気遣いは、言葉でいうだけでは心の中にしみこまないのも事実だ。

高齢者疑似体験や片マヒ体験が、必要な理由はここにある。まずは試してみる、感じてみる、そしてそこから考えていくために、必要な道具なのではないだろうか。

私が高齢者福祉の専門新聞の記者をしていた頃、愛読書にパット・ムーアの「変装 — 私は3年間老人だった*」というのがあった。26歳の著者が特殊メイクと腹帯や包帯などを体につけて85歳の高齢者になって、街を歩く。どんなに歩きにくい、使い勝手が悪い、そればかりではない。人々の視線がいかにかたいかと肌身に感じた。この著者は3年間で体験を続けたが、そんなに長くする必要はない。他者や地域や、そして未来の自分を知るために必要な時間だけ体験すればいい。また、高齢者向けの製品を開発する人、販売する人、相談にあたる人、そうした人たちにも試してほしい。

そして忘れてならないのは、疑似体験は、あくまでも疑似体験であるということ。それがすべてではない。頼りすぎてもいけないのだ。

※朝日出版社から「私は三年間老人だった」に改題され2005年に復刊している。



●東島 弘子 ひがしはた ひろこ
福祉ジャーナリスト、社会福祉士
1987年(株)環境新聞社にて高齢者福祉専門新聞、
シルバー新報創刊準備および編集業務、取材・執筆
1998年同社で月刊ケアマネジメント創刊準備、同年退職。
現在、福祉ジャーナリストとして活躍中。月刊ケア
マネジメント編集顧問、首都大学東京健康福祉学部
非常勤講師、自治体の介護認定審査会委員、(社)シル
バーサービス振興会「情報開示の標準化調査研究委員
会福祉用具部会」及び「評価調査者部会」委員など



株式会社 特殊衣料
取締役統括部長
製品開発担当 藤本 欣也

試作品には
それぞれ思いが
あります。



社内サンプル検討会では
全員が先ず装着してみる
ことから始まります。

●疑似体験セット開発の背景

日本の疑似体験セットの出発は、北米で開発されたものをモデルとして、日本人の体型や生活習慣に合わせて開発改良されてきました。その当時は疑似体験という製品の販売ではなく、インストラクターが疑似体験用具を持って疑似体験会に指導に出向き、集まった方々に体験をしてもらうというシステムでした。

その後、疑似体験の目的が多様化してくると、インストラクターを派遣するための費用がかかり、日程調整が必要なこのシステムは融通が利かないという理由から、各地の社会福祉協議会や学校では似たようなものを独自で用意し始めました。

しかし手づくりのものは雑で部品の寄せ集めに近いものでした。説明や研修カリキュラムにも乏しく、疑似体験を正しく理解できずにさまざまな問題が起きました。体験会では階段の二段のぼりや規定以上の重りをつけても動けると自慢する人すら出てきました。また、子ども用がなかったので大人用を無理に着用させた体験にならない体験も横行していました。重りに頼った疑似体験セットだったために「高齢者は体力さえつければ心配要らない」という声も多くあがるようになっていました。

一方、教育機関では、高齢者や障害者の特性をいちばんに知らなければならない医療福祉系の学校の場合、教官自らが壇上に上がり、病名に沿った姿勢や歩き方を学生の前で演じていました。小中学校では、高齢者や障害者の大変さや痛みを理解しようとする福祉を考える時間ができ、疑似体験を使用することが多くなりました。しかし、疑似体験セットの数が少ない学校では、時間内にクラス全員が平等に体験することは至難の業でした。

●開発プロジェクトの立ち上げ

こうした数々の問題点を是正すべく私たちはプロジェクトチームを立ち上げました。メーカー寄りの作り方をやめ、疑似体験セットを必要とする方々の声を元にした開発を進めていかなければいけないという反省と使命感にチーム全体が燃えていました。集まったメンバーは、理学療法士、工業デザイナー、服飾デザイナー、福祉ジャーナリスト、元日赤家庭看護法教師、元社会福祉協議会職員、映像制作会社代表と専門の方々ばかりでした。

ありとあらゆる体験キットや高齢者のデータを手し、参考になりそうな文献やビデオを集めて研究しました。試作を作っては学校に持ち込み、

使い勝手やフィッティングを試し、最後は小学生に集ってもらい人気投票まで行いました。その結果、完成したのが「まなび体シリーズ」です。

それまでの疑似体験セットの多くは無機質なデザインのものも多く、進んで体験をしたいという色や形ではありませんでした。そこで、幅広い年代の方々が使用できるよう3サイズを用意し、一目でサイズがわかるようなカラーリング、また楽しく体験できるようなデザインのものをめざし、工業デザイナーや服飾デザイナーに知恵を絞ってもらいました。

●使う人の立場からの機能性

限られた時間内で多くの方々に体験してもらうために、短い時間で装着でき、なおかつ簡単な装着方法で疑似体験の姿勢になるものを開発してきました。長さが調節できる杖には、サイズが表記されており、使う人の身長に適した長さにすぐ変えることができます。また、高齢者疑似体験用の眼鏡のように単品で体験できるものにも工夫を凝らし、耳栓は衛生面を考慮して、1組ずつパックされているものを用意しました。片マヒ用足装具は、金型を作りFRPにすることで強度と内反足で底屈という条件を満たすことができました。

装着すると、自然とひざが曲がらなくなり、臀部が引かれる状態になります。上着は体温の上昇を抑えるため、身体との密着部分を少なくし、ひじや腰のサポーターをマジックテープで接着するだけという簡単な装着方法にすることで、多くの方が体験しやすいものになりました。また、マジックテープでの装着はバランスを崩したときなどの安全対策にもなっています。ビデオには装着・研修のカリキュラムは勿論、疑似体験の意義も理解できる内容のものに作り直しました。

●進化する疑似体験の意味と目的

年々販売先が増え、現在では全国の社会福祉協議会・専門学校・大学などの教育用から自動販売機・電機・自動車・コンピューター・ベッド・洗剤等の各メーカー、建築・リフォーム会社、私鉄大手、接客業研修機関など業種は多岐に渡っています。

昨今の犯罪の若年化や子供への虐待等に対し、疑似体験は「痛みを知る」ということを考える機会として重要な役割を持っています。これからのものづくりには欠かせられない存在になりつつある疑似体験を、より進化させ、住みよい優しい社会づくりに寄与できることを願っております。



社団法人 北海道総合在宅ケア事業団
リハビリテーション支援部長
理学療法士 岡田 つげひこ

「疑似体験は問題を体で実感するゲーム」

● 実感だからわかること

「たいした事無いよ」、「動ける、動ける」と小学生たちが、体の右側がマヒし動けない状態になる疑似体験セットを体につけた時の第一声。でも、椅子から立とうとしたらうまく立てず、「あれ、どうやって立つんだっけ」と戸惑い、「いつも出来ることができなくなるのが不思議」とA君は首をかしげています。部屋を出ようとしてドアの操作でひと苦労したB君は、「いままでドアの開け閉めをどうしたらよいかなんて考えたことなかった。このドア使いにくいよ」と不満げです。階段を下りようとしたら足が出ず前のめりになり動



けなくなったCさんは、「怖い。手すりがほしい」と訴えました。廊下を歩いていて前から人が来たのでよけようとしたD君、「横にちょっと動こうと思ったけど、間に合わなかった。ちょっとができないんだよね。」と立ちすくんでしまいました。

小学生たちは、短い時間でしたが普段当たり前に行っている動作ができない体験を通して、「相手の身になって考えること」や、「誰にとっても優しい

環境づくり」を自然に考えるようになっていました。

● 日常生活の動作は無意識にやっている

普段何気なくやっている日常生活の動作ですが、体が不自由になって実際その動作がやり難くなると、どう動いていいかわからないもので、力まかせにやったり、あきらめてすべて介助になります。力まかせでは、ひとつの動作ができたに

しても無理が生じて体に痛みや疲れがでたり、次の動作にうまくつながらなくなったりして、日常の生活では活用しにくいものになりがちです。また、動く力がありながら、その使い方がわからないためにあきらめて介

助だけになってしまうと、その動く力をなくしてしまうことになりかねません。

なぜそんなことになるのかというと、普段私たちは日常生活の動作をほとんど無意識(自動的)に行っているからだと思います。だから、老人や障害がある人が動作がやりにくくなった時にも、今度は意識して動こうと思ってもどう動いていいかわからないのです。誰もが日常生活の動作は学校や本で教わっ



HCR 展でのセミナー風景。参加者は一般の方から福祉関連の方まで様々です。

たものではないので、昨日までできていたことでも無意識でやっていたことは思い出せないのです。

老人や障害がある人が日常生活の動作がやりにくくなったとき、私たちはどんな態度で接しているでしょうか。励ますつもりで、「今までやってきたのだからできるわよ」とか、「どうやって立ち上がっていたか思い出して」とか言っていませんか。それでは、ますます本人を混乱させ、自信をなくさせてしまいます。

● 疑似体験の意義

疑似体験の意義は『疑似体験は問題を体で実感すること』だと思います。疑似体験は、できて当たり前前の日常生活の動作をやりにくくすることで、私たちが知識や技術や理論を通してだけでは気づいていなかった問題を、体から実感として浮かび上がらせてくれます。また疑似体験で問題を実感することは、日常生活の動作がやりにくくなった原因を探り解決していくのにとっても役立つこととなります。小学生たちの例では、疑似体験を通して「なぜ老人が椅子から立ち上がるのが遅いかわかった」とか、「階段には手すりが必要」とか知識が少なくても実感として生み出されてきています。

疑似体験の意義を以下の3つの観点で捉えてみました。

1. 高齢者や障害のある人が日常生活の中でのやりにくさやそのときの気持ちを理解する手がかりを得ること
2. 高齢者や障害のある人へのケアやサービスに関する知識、技術、理論の意義を共感的に理解する手がかりを得ること
3. 新しい技術や課題等(例:ユニバーサルな環境づくりなど)を発見するための手がかりを得ること

※こころリソースブック編集会(編): ATACカンファレンス2000 テキスト【視点は始点】「視覚障害を理解するための疑似体験セミナー」中野泰志 慶應義塾大学 より一部引用

● 疑似体験はあくまで疑似的な体験

疑似体験はあくまで疑似的な体験です。高齢者や障害がある者の大変さを同じように体験できるわけではありません。しかし、体験を通して生活がしにくい実感を得て、その問題解決への手がかりになればと願っています。



札幌市立高等専門学校 助教授
プロダクトデザイナー 森田 敏昭

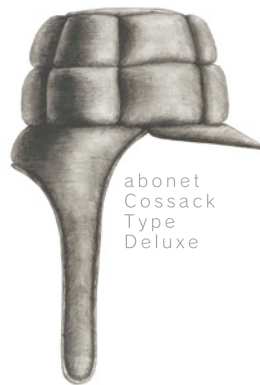
「使い手は 元気な子どもたちや 介護の仕事に志す 学生達」

「疑似体験セットの製作を通して考える 福祉用具のデザインとは」

福祉用具は、使い手の障害程度や障害部位をいかにして補い、快適で自立した生活を送るためのものです。そのためその福祉用具すべてをユニバーサルデザイン化することは考えにくく、むしろ福祉用具と意識させないデザインで、一般製品が福祉用具に応用できるという発想をすることが、今後の超高齢化社会の中でデザインに求められるものと考えています。また、その地域の気候風土を加味した福祉用具の開発も重要であることは言うまでもありません。

●福祉マインドを育む

私は、これまで保護する帽子「アボネット」や歩行器「ポコ・ア・ポコ」など福祉用具のデザイン開発を手がけてきました。疑似体験「まなび体」の製作にあたっては、上述した福祉用具の開発とは少し違う視点が必要になりました。何故なら、使い手側の多くが元気な子どもたちや介護の仕事に志す学生達ですから、単に装着のしやすさや形状だけのデザインを考えるもので



札幌市立高等専門学校工業デザインコースにおける体験実習。デザイナーのたまごたちが体験を通してバリアフリー、ユニバーサルデザインの意味を探っている。



TOKUSHIRYOKU
2-40, 14-CHOME, HASSAMUJI-KUJO, NISHIKU, SAPPORO 063-0834 JAPAN
tel:011-663-0761 http://www.tomoni.co.jp

はない訳です。それ以上に、この「まなび体」の持つ意義をデザインの力によって、いかにして高齢者や障害者の身体状況を伝え・体感してもらいながら、「福祉マインド」の育成を図ることができるかを考えました。

●ユニバーサルマインドのデザイン

具体的には、「形」をシンプルに、「色調」をカラフルに、そして「装着方法」も簡単にしたデザインに仕上げました。

福祉教材でありながらも従来の「福祉体験学習」的な感覚から「変身ロボット遊び」の発想に転換し、福祉を楽しみながら学べ、誰もがこの疑似体験をしてみたいくなるようにとアドバイスをし



歩行器ポコアポコのプロトタイプモデル

てきました。その体験が楽しければ、多くの方が福祉を受け入れ、福祉の持つイメージが明るいものとして捉えてくれるのではないかと思います。

「まなび体」キットのデザインコンセプトは、一人でも多くの人に装着してもらい、お互いの異なった身体状況や特徴を理解し、やさしい気持ちで大切にするユニバーサルマインドを育むことです。今回の開発を通して福祉の分野にとってのデザインの意義を感じるとともに不可欠なものではないかとあらためて実感しています。

●疑似体験だと軽い気持ちでやってみたが、思ったよりきつかった。障害者の気持ちが少ないもわかった気がしました。ありがとうございました。(専門学校生1年 男M)

●すごく大変でした。疑似体験で少しは障害者の人のキモチをわかってあげられたと思います。(19歳 女)

●めちゃくちゃつかれた。足がマヒになったりこんなに大変だと思いませんでした。(18歳 男)

●膝を固定して曲げられなくすると、歩くのも座るのも、階段の上り下りもあんなに大変なんだなというところを実体験でき、とても貴重な時間を過ごすことができました。「この経験を今後の研究に少しでも活かせたら」と思います。(もつすく23歳 男)

●今まで、学校で介護の勉強をしてきましたが、いつも麻痺を仮定してやるだけだったので、麻痺がどれだけ大変なことなのかはわかりませんでした。今回片麻痺を体験してみても、正直とても大変だし、10歩くらい歩いただけで凄く疲れてしまいました。階段も膝が曲がらないと歩きにくくて、すごく恐く感じました。今回この体験によって、麻痺がどんなものなのか少しわかったので、今後の実習などで、今日思ったように体験したことをいかして、介護していきたいです。ありがとうございました。(今が旬19歳 女)

●今、福祉の大学に通って介護の勉強をしているのですが、実際重りを付けて歩行したり、階段をのぼるといった授業を行っていなかったもので、どういうものかわからず、最初はすごく下向きでした。実際やってみても、ものすごく歩きにくく、ちょっとした段差が怖くて大変でした。この体験によって身体障害者の方が毎日どのような思いをして生活しているのか、全部とはいませんが、少しわかった気がします。この体験は今後の私の勉強にとっても役に立ちました。利用者さんがどういう思いをもって生活しているのかを考えてこれから実習にのぞんでいこうと思います。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。(もつすくハタチの女)

●私の父も左の方が不自由です。この体験をしてみても、足がこんなに重たいもの？階段の下りが転びそうになりました。大変さが本当によくわかりました。ありがとうございました。(37歳 女性)

●身体障害者が実際にどのように感じ生活をしているのか知りたくこの体験に参加させて頂きました。あくまでも疑似体験であったので、実生活の中では、色々な外的障害物があると思います。それを想像すると、まだまだ身体障害者に対する思いやりの気持ちが必要だと思われませんでした。よい体験をさせて頂きありがとうございました。(22歳 男)

●今日は体験させて頂いてありがとうございました!!私は介護士になりたいと思っていたんで、とても良い勉強になりました。この経験を生かして、介護士にがんばってなりたいと思います!!本当にありがとうございました。(17歳 女)

●右片マヒの体験をしました。他の部位は必要以上に健康なので、それほど大変ではありませんでしたが、実際には全身弱っている状態でずっと生活していくわけで、大変なことがわかりました。自分は左利きなので少し楽だった。

●歩行速度が健常者とかなり違うんですね。普通に歩行するのでさえ難しい。視界が狭くなり、危険も増すような気がします。体験できて良かったです。

●ついついまっすぐ下を見てしまっ。立ち上がる時より、座る時が恐い。今日の階段のように幅や高さが均一な場合はまだいいが外の階段(ex.お寺、神社)などでは相当な熟練が必要。日ごころから、想像力を働かせ接する事が必要と感じた。

●重いと苦しいので、何かを前向きにどんどんやるように思えない気がします。車椅子のおばと身近に接していて、色々なこととどうしても消極的な彼女を見ると、「もつとやってみたほうが楽しいし面白いのに」と単純に思うのですが、実際自分だったらどうだろうと考えさせられます。今日はこの経験の為に来てみました。やっぱり来てよかったあ。これからの自分の中の何かのきっかけになればと思います。

●母親が左半身不自由ですので、母親の今の状態に少し近づいてその気持ちも少しはわかったような気がします。段差の危険性も実感しました。ありがとうございました。

●歩きづらかったじーちゃんばーちゃんの気持ちがわかった(小4 男)

《いきいき福祉2002》にて

2002年5月17日～19日/会場：アクセスサッポロ
「疑似体験セット 体験者の感想・意見等」

《(社)北海道看護協会研修》より

1999年2月2日/会場：北海道看護協会
「疑似体験セットまなび体 体験を通しての感想・意見等」

●まなび体を着用してみても：右半身麻痺の重たさを感じました。右半身麻痺の患者さんの歩行練習の際「さあ杖を出して、その後健肢、そして患肢」を説明しながら、1・2・3と声を掛けて行ってきました。しかし、実際自分で体験してみると頭で理解していることが、患肢が先になったり、ひどい大股になったり、前方をみる事ができない等、理屈ではなく体が動かないんだということが体でわかりました。

●「まなび体」を装着し片麻痺疑似体験をして：臨床で片麻痺の患者さんとの関わりの中で、ADLの自立とかADLの拡大とか当然のように使っている言葉です。また、その人がどこまで出来て、どこの部分ができていないのか見極め、日常生活行動の中で、その人の持っている能力を充分発揮できるように関わりの大切さ、待つ姿勢の大切さを忘れない関わりをしてきたつもりです。

●今回「まなび体」の体験によって、普段何気なく行っている立ち居振る舞い一つにしてもふらついたり、右手が固定されると更に身体の重心が不安定となった。人間は、両手・両足でうまく身体全体のバランスをとっていることを切実に感じた。また、階段の昇降では不安と恐怖で大変なエネルギーを使いました。患者さんはこのような現実の中でいつも戦っていることを改めて感じました。そして、健康で毎日を暮らしている人には考えられないエネルギーを使っていることも気付いた一つでした。

●この体験から、待つ姿勢の大切さ、そして「共に生きるのだ」という姿勢を忘れてはならない事、学ばせていただきました。貴重な体験をありがとうございました。

●まなび体を体験して：片麻痺者の不自由さを痛感した。歩行に不安を感じる。階段ともなれば恐怖となり、その心状をうかがえることができた。今までは移動なら安全な移動を考え介助することぐらいであったように思う。今後は、相手の心状にも沿っての支援ができそうである。

●また、私の職場は他職種が多いので、ケアの考え方を統一する上で皆で体験し、相手の心状にも必ず沿ったケアが全員でできるよう学習していきたいと思う。

体験して いただいた 皆様の声を 紹介します。

●まなび体：実際に、右片マヒを体験することにより、普段患者さんには指導しているのには自分は全然できないことがわかりました。杖の使い方、足の出し方がバラバラで、いかに健康で当たり前になっているんだと思ひ、今後はこの体験を思い出しながら、指導・介助していきたいと思ひます。右マヒの方に重りがついてれば、よりリアルだったのではと思ひました。

●右片麻痺疑似を体験した感想：片麻痺を体験しているテレビ・ビデオなどは見たことがあったが、実際に体験する機会はなく、1度体験してみたいと思っていたので、今回の経験は勉強になりました。装具がしっかり出来ていたので、装着後はにわか右片麻痺患者となり、立ち上がる時に転びそうになり、また杖の使用方も頭ではわかっていたつもりであったが、足と杖がバラバラになり、一歩一歩が大変難しく思えた。また、階段の昇降は体重移動の難しさ、バランスのとりの方大変さを味わうことができた。

●今回の体験で、片麻痺の方に接する時はひとつひとつの行動に時間が掛かる事、転倒に注意し、安全第一を考え、相手の気持ち・立場になったつもりで接する事ができると思ひます。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

●体験してみても：装具をつけて、階段を降りる時の恐さ、段差に躓いた時に背中に流れる汗と気持ち不安で足が前に出ない...という感じでした。利用者さんのリハビリと一緒に行動には、今度からのこの恐いという気持ちとどのようにすれば安心して移動できるかを常に考えていきたいと思ひました。私は知らないことで、以前にも体験した方の感想からですが、もつと重さを感じた方がいいという意見もありましたし、利用者さんもつと身体がだるい、重いと言っていたことが思ひ出されます。

●たった数分間の体験でしたが、動かさない右手がダルくなり、手にはじつと汗をかいていました。今まで多くのマヒのある患者さんに関わってきましたが、本当の大変さはわかっていなかったのだと反省しています。今後の看護に役立てていきたいと思ひます。多くの看護者の方に体験してほしいと思ひます。貴重な体験をさせて頂き、どうもありがとうございました。

まなび体を 活用して ください。

「まなび体」は今、子どもたちの学びの場、福祉関連の職業をめざす学生やホームヘルパー養成の研修会、一般企業での社員教育・接客教育、商品企画における高齢者、障がい者対応の模索など様々な場でご利用いただいています。

私たち特殊衣料は「まなび体」を、製品・環境をつくる側と利用する側相互の心をつなぐ橋渡しのようなものになればと願っています。今後も、「心」を大切にしたものづくりを通して社会と関わって行きたいと思っています。



地域イベントの会場で「まなび体」の装着を補助する弊社スタッフ



この自動車学校では乗務員への接客教育のための指導員養成に「まなび体」が利用されている。また、地域イベントを開催し住民向けの疑似体験学習を実施するなど、地域ぐるみでの「思いやりのある生活」を提案、そして実践しています。



小学校の総合学習。普段使い慣れた黒板も教材になります。子どもたちは疑似体験に対してとても素直な反応を示します。



大学の福祉系学部での授業。体験の後グループ発表やレポートを通して理解を深めます。



都営地下鉄券売機で実際に切符を買ってみる。券売機などは特にユニバーサルデザインの視点が必要なはずです。



機能が低下した手や視力では新聞を読むことも大変です。福祉系専門学校での実習風景。



実際の街に出てみて手すりや段差の影響を確認。歩きなれた場所の問題点が発見されます。



ホームヘルパーの学習会。和やかな雰囲気の中にも実践的な意見が交換されます。プロの方でさえ予想以上の負荷に驚かれます。

《推薦のことば》

「まなび体」から学ぶ

札幌医科大学 保健医療学部 基礎理学療法学講座

教授 武田 秀勝

ヒトの動きや、体の支配と表現を理解することはなかなかやっかいなことです。「まなび体」で何を学び、何を伝え、何を得て、何を共有しようとするのが大切なことと思います。この「まなび体」の有用性についての素晴らしさを紹介し、推薦します。



「製作者の心」が伝わる「まなび体」

身体の機能が低下して、思うように体の動きを自己コントロールができなかったときに人はどのような行動をするのか、周囲はどんな気持ちに自分を置くのかをしっかりと相手の立場を理解することの眼差しから生まれたものでしょう。

障害を理解するのではなく

自分を理解するための「まなび体」

健康な人は障害者の動きを観察して不自由さを想像して自分と対比することによって相手を理解するのではなく、疑似体験をすることによって自分の考え方を発見する機会なのです。

疑似体験により、現在の自分をいかに大切に、目減りのしない健康の管理・維持に努めるかについて、しっかりと自分の足元を眺める機会にさせていただきたい。

幸せを感じるセンサーとしての「まなび体」

人は「動物」である。動物は動くものである。動く者が動けなくなる制限はとても苦痛であるはず。自分の意志で動くことのできる自分がいかに幸せであるかを実感できるチャンスです。

支え合う、助け合うための「まなび体」

自分が、相手が疑似体験のように動きだけでも制限されたら、どんな生活パターンができあがるのか？自己・他者の両面から生活環境の変化を想像して、QOLの高い生活を創造する機会がつかれます。

愛情を実感できる「まなび体」

疑似体験を通し、小さな援助や激励にも感謝や感動の気持ちが動くことによって、親切を享受できる心が育まれるのではないのでしょうか。

「まなび体」での体験を医療の現場、学校教育、各種職場研修などで、優しい心を育むきっかけとしていただければと思います。



株式会社 特殊衣料

〒063-0834 札幌市西区発寒14条14丁目 2-40

tel.011-663-0761 fax.011-663-0955 <http://www.tomoni.co.jp>